

續哥公部類

五



須賀通  
舍之章

續詞合部類卷之十九

石清水若宮詞合

寛喜四年三月廿五日

題

河上霞 暮山花

社述懐

作者

丸方

正二位行權中納言藤原朝臣家光

正三位行權中納言藤原朝臣家光

兼許豫守藤原朝臣為家

正三位藤原朝臣家隆

吉野弘隆藏書

續庫

吉野弘隆藏書

正三位藤原朝臣知家

從二位藤原朝臣範宗

散位正四位下藤原朝臣

從四位上行右近衛權少將藤原朝臣仔成

從四位下行右近衛權少將兼同備守藤原朝臣親光

從四位下行右近衛權少將藤原朝臣賴氏

散位從四位下藤原朝臣顯氏

正五位下行治部權少輔兼春宮權大進藤原朝臣經光

正五位下中務權大輔藤原朝臣為繼

從五位上行侍從藤原朝臣隆祐

正六位上行左近衛權少尉源朝臣家清

法印大和尚位昭清

正六位上行右近衛將監太神官祢式賢

右方

皇太后后宮大夫俊成卿女

從四位下行權右辨藤原朝臣光俊

正二位行長部卿藤原朝臣成實

女房下野

前權大僧都法印大和尚位幸清

正四位下行左京權大夫藤原朝臣信實

法印大和尚位寬寬

日吉祢宜從四位上行大藏少輔祝部宿祢成茂

女房少將

前但馬守從四位上源朝臣家長

從四位下行右馬權頭源朝臣百長

法印大和尚位耀清

沙汰明教

女房但馬

太田禮賀茂縣主季保

法眼和尚位信忠

沙彌宗身

誦師 中務權太浦為繼

讀師 正三位知家

判者 權中納言定家





よきし〜く侍道はつらとす

五番

丸丸

正二位知家

おきさるはゆ敷るはまの御まうなをともくかきまは

右

前権大信敏幸清

春をうけて流ゆきをみおれとまをぬれは浪

あせりふふりしるまをさるる公許

あせりふふりしるまをさるる公許

しるまをさるる公許

あせりふふりしるまをさるる公許

あせりふふりしるまをさるる公許

あせりふふりしるまをさるる公許

あせりふふりしるまをさるる公許

六番

丸

正二位頼家

あせりふふりしるまをさるる公許

丸

信実

あせりふふりしるまをさるる公許

あせりふふりしるまをさるる公許

七番





右

廿房廿好

善い事此かきみにけり此あてはあまの御心なむと  
たの風情とゆはうとこととすこころは  
しく右のちつきに心なむとふいふあ  
て侍とくしに心なむとふいふあ  
やゆと心

十番

丸

頼氏胡片

あまの御心なむとふいふあ  
たの風情とゆはうとこととすこころは

右 胎

家長胡片

こころし遠くしに心なむとふいふあ  
たの風情とゆはうとこととすこころは  
あまの御心なむとふいふあ  
たの風情とゆはうとこととすこころは  
俗に祢有祢詞と氣為給

十一番

丸

頼氏胡片

あまの御心なむとふいふあ  
たの風情とゆはうとこととすこころは

右 胎

有長胡片

あまの御心なむとふいふあ  
たの風情とゆはうとこととすこころは

たむをれんぬやひてまゝくわて  
おしつゝしよろくまゝしつゝ  
為胎

十二番

凡れ

鏡光

きうせうもはつ風さうみらてまゝ承源立殿那

者

法印翹情

家よたのけりちね花多川所殿を海さちとれ

たふらさるゝぬは体懐りのゆゑつと

うゝくろえられ何秘を胎負まゝ

ふゆーーのさゝ

十三番

凡れ

為健

く野川もはるゝをきと殿の流さるゝ

太

沙汰回教

あちまのくゝて殿ねの川谷をぬて殿

あちまのくゝて殿ねの川谷をぬて殿

あちまのくゝて殿ねの川谷をぬて殿

あちまのくゝて殿ねの川谷をぬて殿

十四番

十九 居

隆祐

ふりてよむしひしむもかひん殿分りて後計水

七

女房御島

武土やう字階門ちりん心人むおとやの御所好

たむしうせあつてううくまにえ給

たしさる歌ハ仰神らんかをまらう

十五 清

た 橋

源家清

あらしらけいさうも道くま海に廣けり後計水

七

かえりあ子保

ふらあうとけさるあはれ川志ゆふおれをさくれ

たをを難たうとてはあふあひい志わく

とよ北とあくらあしよあつて

よ北と初んれやの字こいとき

な入字とつあとしはあか

入山まつと見たの

ちあひとふりらわうあま

うこのりよしあの

あをれいんあ

十七 書

十九

法印昭清

若水川をくわきしおのぼる音を命とて瀬川を浪

大

法眼信忠

きくもく水はわくを物とし浪はまはれん

とふまふししとくしとくしとくしとくし

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

奇定之志却は水乃心きうくと志ふより

てなるるなりとくしとくしとくしとくし

不宝四抄

十七番

大

大神武賢

わあて廣はるく三内川を流せとて流すを流

大

沙汰宗子

音羽川を流すはるかたを流すはるかた

丸請りとも難ん奇に持中絶云小野山莊

浮波之不詠とんゆ流能此道可貴之

源青の因下車急行路頭之信松今歳

凡て深峯より輕瀧流るる餘流ゆり勝

十八番

魯山苑

大

定家

あはれみよし梅雪あはれみよしあはれみよしあはれみよし  
大勝 後成御女

月夜もろろを思ふもあはれみよしあはれみよしあはれみよし  
大勝 宗廟之真以合適俗聖朝之  
天恩雖社元老之至極猶喜後之不  
宜終述其老更北宜詞大哥下謂其艷  
寺之張是干提翫為勝

十九番

友

家光

あつ福とて元山あつ福とて元山あつ福とて元山あつ福とて元山

大勝

光俊

あつ福とて元山あつ福とて元山あつ福とて元山あつ福とて元山  
大勝 其真但大哥安訂殊得とも骨叶の難頑之  
新仍ねつらよここ

二十番

友

為家

あつ福とて元山あつ福とて元山あつ福とて元山あつ福とて元山

大勝

成實

あつ福とて元山あつ福とて元山あつ福とて元山あつ福とて元山

こころ色のちやれとめてしるるありき  
ふぬきやみきんこころしは女りら  
うして見るとみればゆれこいたうら  
はす

大書

大勝

家隆

山打鳥の谷州をきい白き乃白よのまれをいふか

大

下野

まよふとくはれ縁乃入相とをれをゆつも神  
みきのちのほきしり寺とみれと

しんらまはれとありはるのいれは  
よりわし言根神が思はこころ  
しやゆの舞を了る時

大書

大勝

知象

かうしは花月をわらう思はれは  
大  
幸清

みうの野の里とくはれとくはれとくはれ  
大  
大  
見成るはれはれとくはれとくはれ



より請ふ所あり

大六番

大

作成

まのくしとてまぬふくさる花わまふあまの

大 橋

成成

月来はのくしは山乃得とあてては花をゆり

れとくしとてまぬふくさる花わまふあまの

りんとくしとてまぬふくさる花わまふあまの

りんとくしとてまぬふくさる花わまふあまの

ゆきとては

大六番

大 将

親氏

橋狩を山乃得とあてては花をゆり

大

少将

た月来はのくしは山乃得とあてては花をゆり

た月来はのくしは山乃得とあてては花をゆり

大七番

大 橋

頼氏

音羽山女子系雲紙書風うき物たるは

大

家長



等つて自らもほしくなるをいふは出づる花は夕ま  
れさるはほくみゆるはまはちうへくまじりあはして  
ととふ山々かふちうへくはむいしとふれはし  
福徳の

亦八書

大

顯氏

いふさうたうしうしうかてはあへうむさうたう

大勝

有長

昔野山れてもなま乃たあはれは流る春家てぬ

れ神ふふ字さうとて雅とてはゆるは

こひひうしれぬおとくしとやゆんたうた  
なゆんたをゆれしうりくまじり  
ゆれしをゆ

亦九書

大勝

後光

こは里の栞をらうきくあやまはれはしひんれは  
ん

翹清

こはちやぬもさうきくはれはまはれはぬぬぬ  
ん  
ははちあはるはゆはしうきうしゆをてつ書  
入はうしぬはれはしうのくさうしゆの

少くわわくをゆふひつた為腸

二十番

右持

為繼

少くわわくをゆふひつた為腸

右

明教

少くわわくをゆふひつた為腸

少くわわくをゆふひつた為腸

少くわわくをゆふひつた為腸

少くわわくをゆふひつた為腸

少くわわくをゆふひつた為腸

亦一番

右持

寺うすし

泊瀬山持少いれりうらまへし筆ら花色うら

右

但馬

まうたやふをたしめても白雲のふり筆のたて

まうたやふをたしめても白雲のふり筆のたて

ろひあふふんいつもいしりあ持

可二番

右

家清

山氣のふりたれたの色ハ折うてあしきみはく





亦八番

丸持

家務

いんぎんもろもろあはせむらひもぎぬもろもろあはせむらひ

丸

下野

いんぎんもろもろあはせむらひもぎぬもろもろあはせむらひ

亦九番

丸

知家

いんぎんもろもろあはせむらひもぎぬもろもろあはせむらひ

丸

幸清

いんぎんもろもろあはせむらひもぎぬもろもろあはせむらひ

男山乃いしよもぎぬもろもろあはせむらひ

いんぎんもろもろあはせむらひもぎぬもろもろあはせむらひ

いんぎんもろもろあはせむらひもぎぬもろもろあはせむらひ

字千番

丸

範宗

いんぎんもろもろあはせむらひもぎぬもろもろあはせむらひ

右

いんぎんもろもろあはせむらひもぎぬもろもろあはせむらひ

いんぎんもろもろあはせむらひもぎぬもろもろあはせむらひ

四十一番

凡

行能

いんごうふあまひとらぬき新ひんがしのあはれ

大勝

光寛

あまうけいんがわすいんごうにうぬれんあひく

いんごうしすこいんごうのあはれとあはれ

いんごうとやまいんごうのあはれとあはれ

あはれとあはれ

四十二番

凡持

行成

石清水のあはれとあはれとあはれとあはれ

大

成教

いんごうのあはれとあはれとあはれとあはれ

凡た

四十三番

凡持

親友

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれ

大

少将

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれ

凡持りともあはれ



我邦の臣に新しんとおうて下向の心と  
こし不おもむくや仰ん人子之礼狂徒を  
辱平視北之動不登る不臨む可しまる  
るこや仰んた之埋了松為脂

四十七番

九

きん継

ううこく花けのみけいとうちうめあわらしんを

七

明教

いんまてくよとくしんがこふあはれとくよとけり

ううこくしんあしこくしんあしこくしんあし

とくふ懐しきこくしんあし

四十八番

九

きん継

きん継ていんまてくしんあし

九

但馬

いんまてくしんあしこくしんあし

こくしんあしこくしんあし

九

四十九番

九

家信

いんまてくしんあしこくしんあし



いしむとやらひとあものじまりらふしんらとあつたむ

五十一番 式買入

沖きくく人乃てうんいしうらとてしむあむあむ

沖はさ非直初人乃んをいしうらとてしむあむあむ

てしむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ

五十一番

凡如 昭清

日く秋林ふさしゆささささささささささささささささ

五十一番 行忠

とそぬあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ

あまきかりしあまきみらあまのらんあまきささささ

あまきみらあまのらんあまきささささ

五十一番

凡如 式買入

あまきみらあまのらんあまきささささあまきささささ

五十一番 宗夕

あまきみらあまのらんあまきささささあまきささささ

あまきみらあまのらんあまきささささあまきささささ

あまきみらあまのらんあまきささささあまきささささ

あまきみらあまのらんあまきささささあまきささささ

くさくさのゆきしめ雪

雪のふりしめ雪のふりしめ雪

雪のふりしめ雪のふりしめ雪

雪のふりしめ雪のふりしめ雪

雪のふりしめ雪のふりしめ雪

雪のふりしめ雪のふりしめ雪

雪のふりしめ雪のふりしめ雪

雪のふりしめ雪のふりしめ雪

雪のふりしめ雪のふりしめ雪

續奇合類卷之二十

河合社奇合

寛元三年十一月十七日



題

冬月 千鳥 不逢意

作者

尤

前権大納言友原物右為家

散位友原物右佐實

尤近侍権中将友原物右光成

尤近侍権中将友原物右為教

日吉祢宜祝尸宿祢成茂

尊司院兵清普

藻壁院院少将實

春宮辨

安嘉院院甲斐

純還法師

右

沙弥蓮性

沙弥真觀

少将才

正親町院九京大夫

前丹後守友原永光

左近衛權中將友原朝長為氏

沙弥園空

散位友原朝長行家

散位友原朝長為綱

中務大輔友原朝長為繼

判者 友原朝長為家

一番 冬月

九

兼権大納言敦原物古為家

よきらうのしをれあらしのいれらうと  
あひひそそそあ月そらあ

右縁

沙弥蓮性

祿代よりあらしよけ家三株一の  
つやうしれあうすあう月あ

九奇むのしをれあらしのいれらうと

あひひそそそあ月そらあ

あしあ月そらあ

あしあ月そらあ

あしあ月そらあ

あしあ月そらあ

あしあ月そらあ

あしあ月そらあ

あしあ月そらあ

二番

九

敦原物古為家

あしあ月そらあ

あしあ月そらあ

右巻

沙弥志祝

心さびしく又も世に思はれぬ  
清らうと心よりの月の

たのしみ月あつと云れそ  
るさあの前月の月をけけ  
らにゆるくも思はれぬ  
あよせらるゝゆるくも  
まじしきとて思はれぬ  
のんれ月減も思はれぬ  
ゆるくも思はれぬ

二番

たお

たを思はれぬ

冬くれのきこも思はれぬ  
ら〜〜〜ゆるくも思はれぬ

右

少将弟

冬られ月のみ〜〜と本  
ゆる〜〜ゆるくも思はれぬ  
あ〜〜ゆるくも思はれぬ  
月あ〜〜ゆるくも思はれぬ

乃一お物

巳書

左指

天のついでに水子よとてお家のついでに  
けしむやうにわかれ月を

右

左京守

神よとて福ありとてあまねをいれおと  
いふことごとく月をいふことごとく  
た下のついでに  
けしむやうにわかれ月を

女書

左指

日吉神宮祝言宿禰成茂

天のついでに水子よとてお家のついでに  
けしむやうにわかれ月を

右

前丹後守なる水光

けしむやうにわかれ月を  
けしむやうにわかれ月を









月のうららかなあし

右橋

中野春橋夜来の巻

しほれそよもれ森のあし  
らさうらぬる月れうら  
たすあさるもささ  
ゆる心あす下白くす  
いりおほむらゆるたよ  
あ念ふ捨くゆるさる橋

十一番 千鳥

鳥歌

あわじやうらぬる千鳥  
まへたあし

右橋

蓮池

けりく買有れ何尔乃あら  
あし  
あすあたし  
らさうら  
ゆるんたけり  
かきそほくぬる  
あし

竹とまの(田)少へへりれい型似右  
可る橋

十二番

たの

伝實

おさゆつりてくれ人の何ゆい  
をさういけらららららな

右

三の歌

祓まありきとこれ森の夕ら  
川(歌)さけく

のりきとこれ森のむらひ

夕らららららららららら

けくくくくくくくくくく

と

十三番

たの

光成

吹よふあつあつとこれ  
あつあつと

右

少の歌

あつあつと



まはるゝをたむらひつゝ  
しれきつゝのこゝろ  
さうもつゝのこゝろ  
てつむお  
十番  
たれ  
まはるゝをたむらひつゝ  
しれきつゝのこゝろ  
さうもつゝのこゝろ  
てつむお  
十番

書つゝはなつゝのこゝろ  
川つゝのこゝろ  
ななれらつゝのこゝろ  
まはるゝをたむらひつゝ  
しれきつゝのこゝろ  
さうもつゝのこゝろ  
てつむお  
十番  
九番  
おとつゝのこゝろ  
ななれらつゝのこゝろ  
まはるゝをたむらひつゝ  
しれきつゝのこゝろ  
さうもつゝのこゝろ  
てつむお  
十番



借りて

十九番

九條

甲斐

和とさるんお家行のひらら  
とほやうとらたらららん

右

左

何とほやうとらたらららん  
あげらるんお家行のひらら  
お家行のひらららん  
お家行のひらららん

お家行のひらららん  
お家行のひらららん

二十番

九

能運

お家行のひらららん  
お家行のひらららん

右

左

お家行のひらららん  
お家行のひらららん

此の段に何れも後をなすれり  
音も一はりしりしりしりしり  
ゆかりのりしは懐れしりしりしり  
らむしりしりしりしりしりしり  
もしりしりしりしりしりしりしり  
やせしりしりしりしりしりしりしり  
約はしりしりしりしりしりしりしり

二十一番 不遇悲

た

白家

君もよも何そとたなれりしりしりしり

しりしりしりしりしりしりしりしり

右ら

蓮性

風あしりしりしりしりしりしりしり  
らりしりしりしりしりしりしりしり  
た尻あしりしりしりしりしりしりしり  
くゆかりしりしりしりしりしりしり  
しりしりしりしりしりしりしりしり  
ゆかりしりしりしりしりしりしりしり  
しりしりしりしりしりしりしりしり

二十二番





ゆるぎなき御の物と定ん。

女定書

た

の教

なほのいひのいひにむねは備ふの  
えゆちとちとていふとていふ

たら

た京たま

永世をいふとていふの  
うらひのいふとていふ

二たのいひのいひに備ふとていふ

とちとていふとていふ

らすゆもやむとていふ

のいひのいひに備ふとていふ

ゆるぎなき御の物と定ん。

女定書

た

朱茂

人あむ神の志はくやむらのい  
いふとていふとていふ

右様

永光

あむとていふとていふ

あむとていふとていふ



天の原に雲を巻く

右

圖字

天の原に雲を巻く

天の原に雲を巻く

天の原に雲を巻く

天の原に雲を巻く

天の原に雲を巻く

天の原に雲を巻く

天の原に雲を巻く

天の原に雲を巻く

天の原に雲を巻く

共書

右

每

天の原に雲を巻く

天の原に雲を巻く

右

行家







右大臣

前内大臣基一

兵部卿藤原朝臣

大納言藤原朝臣良教

權大納言源朝臣通成

中宮大夫源朝臣雅忠

中納言藤原為氏

左兵衛督藤原高定

參議源朝臣資平

左近衛權中將藤原朝臣經平

侍從藤原朝臣行家

左大弁源朝臣雅言

右近衛權中將源朝臣具氏

右方

融覺

前太政大臣公一

式部卿院御

中納言

小宰相

權大納言藤原朝臣次實季



右邊衛推中將藤原公雄

右邊衛大將藤原朝臣通雅

推中納言藤原長雅

寔西

右兵衛督藤原朝臣為教

法印實伊

鷹司院印

真觀

左邊衛推中將藤原朝臣忠純

右邊衛推少將藤原朝臣隆博

誦師

讀師

判者衆議

一番

未出月

左勝

女房

大穴乃雲紙のこしあぬふちあつて  
うまもし月まのきくきまうら

右

融之見

白妙しむらう白きしゆらり  
日かまらら乃山乃しけり雲

たたきよみしてほめ方たねかき  
ゆわうた方し云た奇題乃人詞のま  
むき神や妙や之報をむく由やえ



丸字ときんぶあいてくもくしん  
といへんこしやくちやくとた  
き下句艶くうあきこくし  
少府あまのしめていた高橋

口番

丸形

太右左

きんぶあまのしめていた高橋  
山乃あまのしめていた高橋

右

中細

月乃あまのしめていた高橋

丸字ときんぶあいてくもくしん

丸字ときんぶあいてくもくしん

丸字ときんぶあいてくもくしん

丸字ときんぶあいてくもくしん

丸字ときんぶあいてくもくしん

丸字

丸字ときんぶあいてくもくしん

丸字ときんぶあいてくもくしん

丸字ときんぶあいてくもくしん

丸字

小宰相

美ゆらり雪吹くは月乃暮り  
んすみくも月をさるの哉

たそけりしあまの月をさるの哉  
つらりもさる人ゆきりしや

らんたそけりしあまの月をさるの哉  
りんたそけりしあまの月をさるの哉

六青

左折

京都の五原郡に隆親

うねりてしるひの月をさるの哉  
月まつらひの袖を白妙

右

淡貝赤子卿

あつたそけりしあまの月をさるの哉  
あつたそけりしあまの月をさるの哉

あつたそけりしあまの月をさるの哉  
あつたそけりしあまの月をさるの哉

あつたそけりしあまの月をさるの哉  
あつたそけりしあまの月をさるの哉

あつたそけりしあまの月をさるの哉  
あつたそけりしあまの月をさるの哉

あつたそけりしあまの月をさるの哉  
あつたそけりしあまの月をさるの哉

あつたそけりしあまの月をさるの哉  
あつたそけりしあまの月をさるの哉

七青

左折

大納言左原朝臣良教

あつたそけりしあまの月をさるの哉  
あつたそけりしあまの月をさるの哉

あつたそけりしあまの月をさるの哉  
あつたそけりしあまの月をさるの哉

七

た道東傳中巻系別巻云雄

山とくみせりし心子ぬしぬし  
山のあかきま月くまきり  
西首れ山くあかき見しぬし  
たたとふししてあはた奇し  
らん月くいりりりりりりり

八

尾給

後集云源朝也通成

出やうぬ月きりりりりりりり  
み神てまほき山くもれや

右

春道東傳中巻系別巻通雅

清なりともしんほりりりりりりり  
おのまきりりりりりりりりりりり  
たのほりりりりりりりりりりりり  
見ゆらふらりりりりりりりりりりり

九

たね

中宮文源朝長雅忠

おやうぬ山くあかきりりりりりりり  
いらひりりりりりりりりりりりり

た

後集云源朝也通雅

待てはいつとてあまのつらみへより  
のこるはつれ月もすみのり  
たゆむをわづらひていづれも  
ゆつとたいししがよそも月  
すこぬるほろつてしをぬくみか  
しふしつあみあめ

十番

たね  
中ゆき左原知たあ  
出それけけれしをぬくしり  
とををうまゆれりし月

た

南西

たよるはゆきあはれとてあまの  
まよるの山はれし月  
たれそりけとみわこくうれと  
新古今乃時雨乃ちとよこあ  
あはれとたよるあすくま  
又拾へきふあすくと作し  
あはれとたよるあすくま

十一番

たね

左原知たあ

夕暮のそすみりぶ、影も  
いしきまゝのゆゑに山はしる月

た 志保 志保 志保 志保

不のうけらるる影もいしきまゝのゆゑに山はしる月  
まはしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月  
いしきまゝのゆゑに山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月  
そすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月  
いしきまゝのゆゑに山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月

十二番

たお

志保 志保 志保 志保

山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月  
いしきまゝのゆゑに山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月

た 志保 志保 志保 志保

いしきまゝのゆゑに山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月  
山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月

いしきまゝのゆゑに山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月  
いしきまゝのゆゑに山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月

た 志保 志保 志保 志保

いしきまゝのゆゑに山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月  
いしきまゝのゆゑに山はしる月とそすみりぶ、影もいしきまゝのゆゑに山はしる月



大佐

鷹司院師

いししききしあかぬふらと  
山をわかく乃月しききん  
たもけせうとうまうゆれとた  
御ありとそ給と被定ゆき

十四番

大お

侍従左原朝臣行家

山と又山乃あかきり  
まうえはしき秋乃来れ月

右

真観

又日山と雪乃もそよみわ  
出ふるもこへき月乃むらけ

凡山のわかく乃秋月た  
乃又日とあかきとあかき  
冥とそおと被定

十五番

大お

凡大弁源朝臣雅言

くゆいまは山のわかく乃月し  
あひやしてしきとそよ

大

凡大弁源朝臣忠経

山乃しとわいし代やせ向し新れ来を  
月れきあなうつてそまふぬし

凡山あふさうかへたへそわの神と給へき  
りあふぬとてあお今をまきしく向し  
し向しとそ給へき

十六番

凡お

凡道末權中將源朝臣具公

みろはしと月へけらうきし中へへし  
く神てしせしうすみけし向し

凡

凡道末權中將源朝臣具公

とらひしはし中へしうしうし  
山乃強はしきし中へしうし

十七番

初昇月

凡お

具氏朝臣

山乃しとわいし代やせ向し新れ来を  
月れきあなうつてそまふぬし

凡

隆博

見せし人し家し向し  
あしとまふしゆし山のをし月

大たしをよみくゆくをよみ成りまゝ家

くゆへきりく名して松あり持

十八番

大お

雅言月片

未と成くとも心しんきなりとを志しける

くゆくやま井く出家月片

大

忠徒初に

ゆくゆくゆく新くあくとけきよん月

くゆくあきよんやんくもまも

大たれ松を松首之海流ゆり持

十九番

大

行家卿

くけきを松に松乃よを内とみくゆく

くゆくあきよんやんくもまも

大

真観

松原くいまくこれゆくゆぬまゆくよて

山乃松しんり月とくわけき

大たしをよみくゆくをよみ成りまゝ家

二十番

大持

経平卿

やうらうらぬ風うづいしあうらう  
山きうらうらうしすうら月うら

七

帥

出ぬ事しとと入しただくみぬ海と  
きうらいつらうら月うら

左石ともう指之得矢を被定持

二十一番

左拾

湯賀平郷

是川をん庵とすうぬれうぬる  
きうらうらぬしゆく月をふわけき

右

實行

きうらぬし今やみうらん河川を  
山きうらうらぬれいつら月うら

左哥里の乃てりう庵うらとたうら

うら申えゆいんぬれ

二十二番

左拾

高宮郷

きうらゆんしきういひつてう是川を  
山うらいつら月乃ゆく川え

右

為教郷

川のありき老をそぐ人々と山ありき  
秋乃もかこくいけり月あり

たち月れ新旅凡早くやこりゆり  
たのありびりいけり秋をこりゆり

たのあり

二十三番

たのあり

為氏卿

とみありうけしとやけり秋風  
やもろわくしとよき山あり月あり

たのあり

宗西

山あり海ありなすしとよき山あり  
やあり山ありけき月ありとよき山あり  
たのあり今いこととてたのあり字とよけり

二十番

たのあり

雅忠卿

とよき山ありとよき山ありとよき山あり  
月ありとよき山ありとよき山あり

たのあり

長雅卿

いとありとよき山ありとよき山あり  
とよき山ありとよき山ありとよき山あり

凡そ部云る百くけりてを何と云ふ  
皆ゆき

二十六番

尾給

通成郷

くはの代乃ゆくしと兼とゆく  
くもりけりて秋乃よを月

右

通雅郷

くつこくを弁とゆくして昭とや  
今うけみある山乃しれ月

くちりゆくゆをたふまふくしてくひき

くはくく人ゆて凡を給とゆくからる

二十六番

左

良教郷

くしのちる月を山くく三三  
ゆくも兼ゆけてくくりくかた

右

乙碓郷

くのちるす唐をくしと兼とゆく  
くこやる山乃みぬれ月乃

くしのちるを三三山を兼とゆく  
くはく兼ゆかやゆひくたくかして

カ指下夕やりくらきとふゆき

二十七番

左 晴

隆親卿

きうれいれいせいしつふくも雲井と

今頃ののろる月入ふけうも

者

資季卿

いけししきくぬくゆきまうきり

山きりしきりしつら月うす

きりしきりしきりしきりしきり

きりしきりしきりしきりしきり

月を了賞就し由一回うて為給

二十八番

左

新内大臣

松きりしきりしきりしきりしきり

なをきりしきりしきりしきりしきり

者

小宰相

山りしきりしきりしきりしきりしきり

者しきりしきりしきりしきりしきり

丸山きりしきりしきりしきりしきり

きりしきりしきりしきりしきり

二十九番

丸船

若大に

つゆけつふき祢乃松のよ末くり  
今みしうひる月のしやけい

太

中絶

お月こみやうこしあつ松ふりしり

けりしうむる秋のよ末月

太上りせんこりうさうやういそをゆ

二十と丸やきしうさうさうきうく

定中して為勝

三十番

丸勝

園白

峯し頃松まわし張すすそ

うしろ空りし月を成ゆ

若

中絶

うらつきやう天入り星る雪両り

よをきりし出る秋の月うき

丸松のあしをせすそや月れ

三よごりしゆ太よをきし出れ

月うらつきしきさうきりや切也



うけたらひもさしうらむて負ゆりし

三十一番

反勝

新園白

いつふらりむらりうらむらぬ煉を月

くりしぬ所然り行も未だ空

七

新古政大臣

あしつら山をくうぬむらりしれく

あふら茶ふさといつら月々

たまのら紫らと出ら月とみをとひく

三十一番とたけらとあつらぬ所然り月か

以下慶喜之事やと西府申之右勝

三十二番

左勝

右勝

雲乃らう山乃らうらうまゆあふ

月をよこまけはむらうらう

右

融見

いつふらり月しやうらぬらんう山

光りしうら秋をまよらうら

たけ山乃らうらうらうら月をよこまけ

うらうらうらうらうらうらうらうら

もかちてうをせうちこらうのゆいり  
たす月一りふきまの山あまふゆいで  
ふとてすてふゆき

三十三番

凡ね

女房

久しうなりてうや月しやすしん  
秋入りすふさろとて

大

融え

すみろりてうか新まかふうく  
ねりもかうを月うむけり

ねゆきも心くらそ月れもゆき  
きとふへきもなうあひもさうし  
たたとし小ゆしとて大ねも優と  
まうゆ下りもて持しゆいゆき

三十四番

凡ね

新園白

久しうゆ空りてうゆりゆき  
秋入こらひに月うのゆき

大

前太政大臣

すこのちらふゆきゆきゆき



お

中約を

雲情こぼつて山人のあはれを  
をばさるるすむ日とけき

三十八番  
三十九番  
四十番  
四十一番  
四十二番  
四十三番  
四十四番  
四十五番  
四十六番  
四十七番  
四十八番  
四十九番  
五十番

友作

前囚大良

相もと見ぬきこころら  
來出せうたひし日けり

大

小宰相

目くけりしきこころら

人志のあはれを

こころ書こころら  
お月をゆきとる

望も垣の目けりし  
人けりし

三十八番

友作

清親卿

清もりのり  
おるる

右胎

資季郷

山より中へゆけぬれはくは雲晴く  
少くもみえあすうらる月斗

三十九番 ぬれ酒とて空ありてはくは

題ふんはあふと中人のもた夜雪

双畫月汀睡んあつしはくは

由人へ多定し中ゆき

三十九番

丸

良教郷

かきあれはくはくは秋乃中

やすくぬ月れはくはくは

古勝

云雄郷

雲晴てゆくはくはくは

おくもあはくはくは

云又田名くはくは

四十番

丸

通成郷

あふくはくはくは

月を山へけきくはくは

丸

通雅郷

何事をいみちからふ所や外は月介紙  
今宵去れはくはふと志は

大魂を賞あつてふへきよく傳へし

色もくわはくを餘りやと作らふわ

凡ん欲よりきよらりておと被せ給き

四十一番

左 雅忠

名もくわはくをいみちからふ所や外は月介紙

今宵去れはくはふと志は

大魂を賞あつてふへきよく傳へし

色もくわはくを餘りやと作らふわ

凡ん欲よりきよらりておと被せ給き

四十二番

左 為氏郷

久明くわはくをいみちからふ所や外は月介紙

今宵去れはくはふと志は

大魂を賞あつてふへきよく傳へし

色もくわはくを餘りやと作らふわ

凡ん欲よりきよらりておと被せ給き

四十三番

左 為氏郷

久明くわはくをいみちからふ所や外は月介紙  
今宵去れはくはふと志は  
大魂を賞あつてふへきよく傳へし  
色もくわはくを餘りやと作らふわ  
凡ん欲よりきよらりておと被せ給き

たまふかしのふきで月みくららほし  
して勝の由被定

四十三番

高定郷

秋をしのぎ空をすまふららて  
あをすみゆふのたしめ月を

四十四番

為教郷

あふたがよこしひ秋の中  
ふけつぬとすつる月を

あふたがよこしひ秋の中  
ふけつぬとすつる月を

四十五番

資平郷

あふたがよこしひ秋の中  
ふけつぬとすつる月を

四十六番

安貞郷

あふたがよこしひ秋の中  
ふけつぬとすつる月を

あふたがよこしひ秋の中  
ふけつぬとすつる月を

あふたがよこしひ秋の中  
ふけつぬとすつる月を

四十七番

為教郷

あふたがよこしひ秋の中  
ふけつぬとすつる月を

九

經平郷

一しつらし目まをるるにさへいし  
うげふまよはる光しつら

大勝

帥

さるる面しつらくはの月や  
しつらしつらしつらしつら

大勝うらとつらとつら  
さるるしつらとつら

四十六番

四十九番

河家郷

今しつら板井地あつものうこまを  
あふくゆあつ月しつら

七

真觀

世と照しつらしつらしつら  
しつらしつらしつら

大吾しつらしつらしつら  
あふしつらしつらしつら

しつらしつらしつらしつら  
しつらしつらしつらしつら

四十七番



九お

雅言朗片

やとくひしよとくしよくまふけりぬる月  
ゆよとくしよ乃北くうくうら出きて

右

忠建朗片

名きりけりふふいひきりけり秋とそや  
月もつたりの定しすひん

ひき又あふき名ゆき持  
に十八番

左

具氏朗片

月か今ちをせり秋をかち空り

とくしよとくしよとくしよみくけり

右

際博

なう空りしうけすゆり秋れよ  
月より月りゆりあきれ

太月山を月つるふもふあは  
とふやあきん結て凡しせらごうあ

とそ持結さ

四十九番 漸傾月

左

具氏朗片

おしゆのし急まゆきと空 沈て

更ぬる夜の月よりそしき

大始

澄祐

おしちもゆさよろつふろふてこ  
とちちとくは自ら文抱く

空とみて日とさしき  
ろはふし給く由被定しこれこそ吾乃  
少く初初ふれふれ始々

五十四番

左ね

雅定初片

よろりふ月ハ西より成ふけ

んばくろふかちしゆふ

大

忠継初片

文りハいつしひろあつひ  
月あつ久あつあつと待つ卯

ん吾月次入と風をわくつきてさ  
らぬ入はゆけゆきをひつなすむ  
もほくあつあつ久吾あつあつな  
くあつしりしむくことぬきつて  
りしりし

六十一番

たね

行家郷

月ハもやゆけしきくふわつまる  
りくすき勢しうもくみさの

た

真觀

老らくそふけしくまふらあし  
まふけしめ 結乃よれ月  
あつまの祝なきふけしりてゆけ  
よけしきくも良く乃才のゆく  
も急ううるるまきしきくしとせ  
つれたた乃月者んあつしとてゆきす

五十二番

たね

經平郷

初集しる月乃うけしきくしとてなふ  
あしと秋とすめゆきつて

た

師

初入来りあつし秋入文出  
おり中も月のみあふん  
たれそしと志しし中うおしつふ  
あつしゆしゆしと秋きたあみ  
とれしゆしゆしる月そつゆけし

と作下ゆれて捨字と被り

五十二番

凡お

次貞平郷

後天

口きてくふゆうけ捨くくけぬけくを  
りくくを秋く月やとひけん

た

實貞

月ハケふぬきまきくくふ人かろふ  
秋くくくひるふぬきくく

右番 ちぬくくく若平ゆくと下白

先年知家々詠とふく三位侍候いじ

て為持

六十四番

丸捨

高定郷

いつ乃乃小ぬけぬくけりくくゆふ  
月をゆくともみぬ地く

右

為教郷

みくゆくくゆ又文ぬくしむくくく  
月をさうくくくくくく

太山本ゆ断をくまうくゆくくく

くゆくくくくくくくく

二十六番

丸信

為氏卿

みゆきまきわたり水も成りし月を  
ちくれしうもれうらうら哉

大

宗西

りよ中やあまのえまじりて見ゆらん  
しちあまきうけり月夜にぬ

大寺よりあまのあまのむすひわてり船行

二十六番

丸信

雅忠卿

行末をその公とてきりし秋れよま  
月らふしにまきうけりぬ

大

長雅卿

みゆきまきわたり水も成りし月を  
ちくれしうもれうらうら哉

とちあまのあまのむすひわてり船行

二十六番

丸信

通成卿

みゆきまきわたり水も成りし月を  
ちくれしうもれうらうら哉

大

通雅の

ふつあひこころしとあまねくあはれ  
をうしこころしとあまねくあはれ  
ちふしとあけしとあまねくあはれ  
うらたすうこころしとあまねくあはれ  
あまねくあはれ

二十八番

さし

良教郷

うけぬとこ西へがしぬくこころし  
ては月をみたりとあまねくあはれ

大掛

雄郷

山ろくもこころしとあまねくあはれ  
あまねくあはれ  
あまねくあはれ

五十九番

大掛

隆親郷

あまねくあはれ  
あまねくあはれ

太

資子郷

あまねくあはれ

乃きいもれあはれ月さうゆて

たしゆせうこうゆくゆくゆくと九老一

やうせうせうてか給

六十番

九老

前内スル

月まてしほはるあつらふ山むらさき

あふれきひれをさみそん

た

小宰相

なうちわさてや入かうさうるゆいよ

わすれさう月よおのころはら

題はんしんまじし分明さすはゆさた各よあ

六十一番

九老

たまたま

さうらほれうさういり定ましかうまて

はぬよはひらうげをまあよ

右給

中納言

いしひ月しみにもやゆりりて

福をさうまのそんれいん

を事後京おほぬこの歌乃中よんり

かりしゆらうしん位待候やして右膳

六十二番

丸掛

園白

晴るひの鳥の福あきて文を  
まこととせば月をけり

丸

河内

深くくう山よりしもかよひて野く  
度花々と信りかぬ月を  
おやれし月竹ふちれおほくを考負

六十三番

と

赤心美白

みづまじりまわり来りしつゆを  
おののみをとも月を

丸

赤心美白

<sup>傍</sup>おのれ顔にけり人まじり  
おのれおのれけり人まじり

丸掛  
丸掛  
丸掛

六十四番



尺牘

廿房

日之今朝し法ねりけりしを  
つゆきさるひふりてのみせし

融覚

あやしくもふりしやてらね  
あやしくもふりしやてらね

あやしくもふりしやてらね

あやしくもふりしやてらね

あやしくもふりしやてらね

六十五番

欲入目

と勝

廿房

有明乃せし山乃ふりし  
入りしきさる月乃せし

太

融覚

さうしそい山乃せし

たそいでい山乃せし

たそいでい山乃せし

有奥山由田座中てを好はは

わくろふよとよとそふい

六十六番

大持

前園白

いづれもあつたふもさうゆうりき  
秋もといひしふれも月

右

新大政大臣

誰れぞの信まをさして入月を  
なすみけこふあをりゆ山

たつとゆりゆき由名之たふり  
さりの原は無わのゆたおし由被定

六十七番

き給

園白

世紙うしとまふんかきこりゆり  
初ゆりや月乃山り入心

大

市便

ちきりゆりもわきふちり  
志ら〜やま〜山のし

を法せり〜徳化下賞就と大相似  
ゆり〜ゆり〜ゆり〜ゆり

六十八番

大

大尺

乗しゆり〜ゆり〜ゆり〜ゆり

志すくはくまは山ふりし月

右拾 中絶を

行く月乃のゆくはししして入つころ  
山ありをつらくるふちりて見

んふとふとさくさくをゆくとたすは  
志た始とすしりしゆき今ん始りし

ふやうとさゆとともしつれなゆする  
あつとさるふりし如とも帯うとこふる

へくやとそむけりる

六十九番

凡お 前因大尺

あふみはくはるあつたふせしと  
みゆらうとも月はい

コナ 小宰相

へつはふいりもほくはく月紙

きれけつ山し今いさう  
きをけ初ふまのく百了為わく由り

七十番

凡お 隆親卿

娘の月をうらをいふ志のへつて

屋海乃しつろく名成みそし年

七

次貞季郷

そつ廿八廿九ひよまへ入あふ山のらふ  
うらわく月をわつれをのみ

たふゆきふもたふそと老の心をわいし  
へしとわお

七十一番

七拾

良教郷

大ついでり秋行月細山人くま  
けつきふりさうさいし

七

公雄郷

そ成乃こ成むらりそみゆらよとら月  
うらわく山をぬしとらぬ

七十一番  
七十二番

七

通成郷

山乃しうばさすれをと物てを  
そと入やうの月の

七拾

通雅郷

ふあはゆふさしとらぬ月うけを

山乃らうて葉はさるのこりるが

た有卯乃日之介 越心くゆ者す之負ゆ

きした下の色いりくもくみくゆ

七十二番

たお

雅忠郷

いふてきくうーうんどのいり

つうの月のまの明れか

た

長雅郷

おもうひりてにきれくすう入りの

りてん城いつちや

おれ又有刃の月ゆれおとく

いとしきと下の指さす定こにともく

てしわお

七十二番

と

為長心

小く山ありとくけい

松のつれふあけつれ

たお

深あ

入まてし松のころあふ来す乃月

志丹くしをゆもくみくゆ

とつれなる月ソいお初せぬさゆりそ  
へしゆうへた老の心一くきニカれ  
うとつて玉輝ししれゆり

七十六番

九拾

高定郷

いひきぬあなみあそふのこ  
今いといふ月のけり

七

為教郷

わつあつしあきとわつし  
梢のつれ秋の月けり

とた定乃山と急暮涼なりとそたのつ  
あつあつとあつと祝之

七十六番

九拾

資平郷

と向の浦とあつとあつとあつと  
あけつとあつとあつとあつと

七

實行

あつあつとあつとあつとあつと  
あつあつとあつとあつとあつと

と向の浦とあつとあつとあつと  
あつあつとあつとあつとあつと

ふらやうよきこゆふうしゆわのいふかぢ

七十七番

たね

経平郷

きりまを祓ぬよりのせきうりふくしりして  
山のしちく月のこゆるま

た

師

そまゝぬ月うらとくせうりまれ  
はもきくくくくくけかめつ

お首又魚み下有勝負はくあるお

七十八番

八た

行家郷

あふりみふやいひといふよし神し  
んほくくや月のいふし

た給

真観

あふりみふやいひといふよし神し  
んほくくや月のいふし

あふりみふやいひといふよし神し  
んほくくや月のいふし

七十九番

さ給

雅之胡片

畑のよろそしとろころあつたはこよし  
あつたよろそしとろころあつたはこよし

七 忠純別記

あつたよろそしとろころあつたはこよし  
あつたよろそしとろころあつたはこよし

七 忠純別記

あつたよろそしとろころあつたはこよし  
あつたよろそしとろころあつたはこよし

あつたよろそしとろころあつたはこよし

八丁番

九 具氏別記

あつたよろそしとろころあつたはこよし  
あつたよろそしとろころあつたはこよし

七 隆博

あつたよろそしとろころあつたはこよし  
あつたよろそしとろころあつたはこよし

あつたよろそしとろころあつたはこよし  
あつたよろそしとろころあつたはこよし



續哥合部類卷之二十二

十三夜番合

建治元年九月十二日

題

十三夜情

松月出山

月照籬菊

庭月吻虫

旅雁叫月

月下擣衣

寄月忌戀

寄月忌戀

月前感思

月前祝言

正作者

廿五左



女房

三位中將

法印道雲

隆禱朝臣

教頭

重經

邦長

右

安嘉門院右衛門伏

則任

則雅

親長

顯綱

左衛門督

行實

誦師

讀師

判者真觀

安嘉門院右衛門伏  
則任  
則雅  
親長  
顯綱  
左衛門督  
行實  
誦師  
讀師  
判者真觀

三位中將  
法印道雲  
隆禱朝臣  
教頭  
重經  
邦長

則任  
則雅  
親長  
顯綱  
左衛門督  
行實  
誦師  
讀師  
判者真觀

十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三

一番 十三夜晴

左

いかにみちかきぬねほろいふとて今宵は長月空

右

安喜の院右通御

今宵もとぞおほねほろいふとて今宵は長月空

左方 匪 意 貞 此 夜 之 清 光 誠 是 美 明 晴 之

德 化 加 之 涉 風 雅 之 二 義 飭 露 詞 於 丑 句

者 欣 神 也 妙 不 可 不 感

右 哥 雜 子 殊 難 亦 且 一 一 也 右 下 行 上 秋

乃 長 月 之 俗 俗 知 叶 字 之 山 内 之 字

え侍りし美曆二年内裏哥公小

此書乃日ぬぬ志のりも入格乃も紫とみえすなりや  
判乃訂云格をふともしき上文字は行福と  
あそふと漢のほくうしけりうと詠りてれ  
ころふやけ秋乃長月ハが乃格れ青紫いと  
なすももや格(う)したる向た不及た  
勝負す謂玄隔云歟

二番

た

三位中將

まの月名も紅葉ももあつれてふすはるる風をれ

た

まの月も紅葉もあつれて長月を今宵ハやもも風吹り  
おのりあつてハやもあつて吹十解れり  
ま一にハ格のりもあつてらよれり  
ころ凡格しこりた奇もなるり  
神しし格もさゆあるては格勝

三番

た

法平道云

こゆるあまのけよも月はけ清なるもいそは月をさ

た

則雅

長月廿九日乃石段今宵をそまれば秋の風を感れ  
た乃十日の毎も打つたれりてを争乃  
やうにときこえすやゆん主生二位等  
長月廿十日のまゝ一乃二日れをさすはく  
けて各もささみよをばし之をさす  
れともしてゆも今れ初句はすさ  
うらげてりゆりてしう一と争いさ  
たる朝入りゆりていひゆりてさす  
晴るる風をばしゆりてゆりて  
たすなまゝの空の月よまきりてさす

ハゆり初しゆりてさすハきりゆりて  
さすゆりひだるゆりてさすゆりて  
てさすゆりてさすゆりてさす  
おとさすゆりてさすゆりてさす  
さすゆりてさすゆりてさす  
侍も天徳の書哥合にゆりてさす  
ゆりてさすゆりてさすゆりてさす  
用意と判るる人となすゆりてさす  
くたすゆりてさすゆりてさす

心書

た

隆情胡片

いづれゆふにふりてみるに十束のつらさやうな

た

親長

いづれ老成うてありはなまの事か実をい

と尋ねりし一葉うして題のいふをい

をいふを信ぜや和奇は本意しつゝあはれ

るまじきや た奇あつたなる二葉がい

ふあしつゝいふもたよといふに

あはれけりし奇よといふ

又書

た

教頭

長月けふあふれ有るは寧ろゆめをさうり

た

顛尾

長月同くを弁せしるれし今宵月照ゆる

とゆれりてしゆれりてしゆれり

六書

た

重複

長月あふれ有るは寧ろゆめをさうり

た

尾顛

長月あふれ有るは寧ろゆめをさうり

とらふ長月かろふ侍はなほとてハ十五夜よ  
ふれこみいまふ社より一自來のゆき  
そいふおゆきいんらんらんらん  
えしてやちのゆきもまるとおゆき  
ゆき右方村中ぬにはいんらんらんらん  
とくしおんこせうおんらんらんらん  
みるゆき 大平もろしおんらんらんらん  
ゆきふかふらんらんらんらんらんらん  
乃月くしもおんらんらんらんらんらん  
月神田明らんらんらんらんらんらんらん

えんたし建しお勝  
えんたし建しお勝

七番

大

邦長

長月や月けきしおんらんらんらんらんらんらんらん

大

邦長

照る家今宵いり ちの月けきしおんらんらんらんらんらんらん  
た十日おゆき乃春らんらんらんらんらんらんらんらん  
もやゆき乃春らんらんらんらんらんらんらんらんらんらん  
しすして 續後撰 後鳥羽院御歌也

うめおれおん志うの備きと大寺下句新  
物撰奇し入道希大納之實 詠死不志  
こうたかうあし大かきくやこて欠しん  
るるへまふこる

八番 松月出山

来た 三位中将

吹くお華州風お音すみてあけり晴窓月おけ哉

すた 顯鑑

まろしほ屋と娘のふこ桂らふお出あ来出月歌

大寺下句とこ山乃まここいしく侍るるは

寛平れ物判りな山こらひこゆにけたる

こそ以んこいお詞あつて讀み奇におしと

ゆさつとれさういとしひの度とこ山乃まこい

月心は病のりる(お)もや 大寺下句

朗詠乃好多詩に望山迷月松花歌と休

くれはとちとて願あつて吹らる

いて山月松らりらるは出るこて詠あつ

く悲とちつていせしておぬるたけあつ

つとて下句為結

九番







とよあしとくやとみまふはれし山はらぬ  
おやぬされし川みそを月影とてさふ  
ふいれ月 是は石川集茶大納言歌  
てのまゝ 誠之希百是解く思撰了  
しとくはれし法皇御解亦ゆ 教見  
被るを法洞とて為公物とて法好士  
任雅をよめて被破却去欣

十二番

大 邦長

詠の度とれ松はむゆらけ月給未了急に松まふ所

大 安富門院大徳師

とてしらをまがらせきあはれしとを月をさけき  
と松はむゆらけ月給松をまふまふとゆ  
しとまらむとれいしゆひのちゆは松とゆ  
ゆらん事ハいつるまけき松松とゆも  
わつとくやゆらん和歌れ利只ハゆらと  
して松乃まふ海ハわれこをとやうにハ  
よむしとれし松まきハゆらたかひりも  
わつとくまらけし松事こころをみえゆれ

ちうちやゆしあらまゝいふはみえと

大相対うんこも月をふりきこもいさひ

いひまうてもめふとひさくくもみ

ゆきしたくし讀後撰

今宵もついで月をみよ山嵐月

いんよやうかいゆんうやうふふと

ととられちととつあひそゆき

志うもかひてまうくもゆらて乃て

字と耳とくらあうと白書

病よも五之位入道判云

はれもこあうも年候かたは

あまういれ字しうはとやと誰とゆ

れたらとにわう文字あまのゆき

おたしとるさくも

大書

大胎

サ房

筆たきしれもまうと空とそ月嵐

大

親長

山乃金れあはらぬ月嵐はな

れ今嶺く松彌書文柳今と之声嵐

桂敷深寒玉之光誠為秀逸誰不賞玩  
心大奇迹代雖之と申はるし其字有口し  
彼優高隸年不令惟佳字

十五番 月照籀菊

大 法印(道)雲

其竹乃まきし菊より月よりて同じと云ふは其の  
大

大 則任

もうこれに廿五の字の志菊はさけるは月照の  
曰くは年ハらぬけりよせしが  
くもゆきしと題乃て字方以上句にはく

ふしてゆん離と云ふは月とこゆとハま  
あはぬしとれは海はさるはれ  
うらみとゆきと云ふはこてあは

十六番

大 隆情胡臣

と云ふは名を光と云ふは月と云ふは

大 則雅

白ゆは名を日と云ふは月と云ふは

大 則雅

大 則雅

此丸為腸

十七卷

丸

教顯

了きよひのゆきし道行丸也よほしてとうる秘製存

大

行實

漢菊子時をあらき月付老之ふ羅ハ也風ふらん

丸奇文字ゆ色牙割後露練太奇下句有

厭黒子又痛幹腰云是云皮石了欲し仍以

為持

十八卷

乃くしと養中せしあわゆ初らんハいそ

とが月せわれハ必た為腸

千五百番固壽合

清くふゆの宮古瓜うのせん若菜は心御しあハ君丸路

栗田口入道出幼を判云とらとらとらと

とまももまももとらハせんこととら野

よりそま右ふハ山子れ事うのほ厚り

きこゆのふゆり

これハ又之ゆとらとらゆり字中得く

日奇合

あいなくも時を以て善乃のくも或詩人以此を詠す其度是

顕昭判し初句乃あいなくもとくを以て

なしくゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

勝負をとりてくゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

大 重信

清波のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

大 親長

えりともぬ花あはぬ白菊はまらぬあはぬあはぬあはぬ

を偏に月照之秋似賞霜添く又秋

右に花あはぬあはぬあはぬあはぬあはぬあはぬあはぬ

葉紙敷をふりてへくくくくくくくくくくくくくくくく

白菊こそ花あはぬあはぬあはぬあはぬあはぬあはぬ

おはまはくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

わんわんわんわんわんわんわんわんわんわんわんわんわん

て誰よりれり幸、有るは  
いよの宣治八年高陽院寺公庭房  
御前より山乃御建久四年六百番  
凡乃やより乃奇これくは誰判討少  
えりりころわら公私多公以誰不了勝斗  
とれくはれし山のこまきくや世心  
とのく今れ寺哥合思度し例為御寺  
七雅為御謹為宴會者了為珍重を凡  
十九番  
凡 那長

白兼風離よまふ想れ、あよ白ら然もは月をこ絶

大 願絶

少くわら月はあふをえて病はれ上は信志が  
かど光紙をとりあふは古今集乃あまれい人  
とよ紙わい信事まわと弘長二年九月十二日  
内裏小會

あひあひはれ離よ思月は光紙花し山若乃白き  
とよちゆり今や奇は逐之くこしゆと  
實にし本寺をれしとてるうよそりゆし  
ししはれ乃あれぬのこししあし後れ







新のりくまきしといふとがまひてをゆれ  
古方新古今

茶も酒もたうと月よとてしをうけゆくや  
亦二番

丸

教頭

わらわしと誰かのしと古つれふひも月よ意はた  
た

昔後にあさちう庭れ月をもてゆに松よけなひん  
とちうかぬつとろとながしなうて月もか  
り

たゞ一人とろうたのむらうと味とよこや  
を幸後世のむらうとむらうとこれと  
つれづれにふらふやとみとすしと庭も  
き

亦四番

と持

と持

月よなればさうととて月よとと月よとと月よとと  
ち

あさちうを庭れ月よとと月よとと月よとと月よとと  
新古今

蓬もろふ小松虫はつ

新書撰 ぐれとてなまもあまのあま

と知しそ人をね出れきさこね

いとゆきいりましくね下り

中五書

大 将

印長

露降きたれ葉繁れ虫は神をたつひのふり月だけ成

大

親長

月もまきすつらつともあはらふ高あつと虫はつ

はばきせんあぶらゆもこそわ持

中六書

大 ね

甘房

目もこす月しろくもさきあがりれんこねり

中七書

副任

おとつゆささう庭ねけはなす誰か松虫は声

んた乃松虫はつらむれをこそとるん

ふくこもゆきとつむさくねとよ書家

もさうもまはこれとらひはひのゆき

ハ惚持しやゆきん

中七書

たね 二位中め

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

たね 則雅

月ついでわさねのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

亦八重

たね 法原

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

たね 顯伝

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

亦八重 藤雁叫月

たね 教歌

あまのこゝろをわさねのこゝろにあらはせしむ

大 別頭

わたりてはよしのあはれをうらみし  
こころはなほあはれをうらみし  
あはれをうらみし  
こころはなほあはれをうらみし  
あはれをうらみし  
こころはなほあはれをうらみし  
あはれをうらみし  
こころはなほあはれをうらみし

少青

大 勝 重信

わたりてはよしのあはれをうらみし

今太 毎朝の院大馬作

旅のうらみしよまをうらみし

大方月のうらみしよまをうらみし

こころはなほあはれをうらみし

あはれをうらみし

ゆりや但弘長三年の裏十首の月希馬

希馬のうらみし

天来と旅のうらみし

こころはなほあはれをうらみし

たきいしれえなるとのさききつたれら  
あぐまをひ顔をしやたつらうくゆれも  
あいのとりおいかれゆる老れいしころ  
しくやそしきくくおとりし

可一書

た 勝

邦 長

月けおちや平中たけしあたる鷹のさき

た

別 任

今宵そがれも涙もあはれいねも鳥のこ

大方もねいふらうとまうゆらんおねいふ

いもゆききうもゆきあはれぬのこさき

ゆきしききうもゆきあはれぬのこさき

たうろしきいあはれゆきも勝ゆへや

可二書

た お

女 房

萩とやあはれみく月けいさきあはれぬ鳥のこ

た

行 實

さかきかひしき地方空み日とやも鳥のこ

たきあはれしきいあはれゆきも勝ゆへや

たきあはれしきいあはれゆきも勝ゆへや

かききうてきこゆるま

たわりのたわりのこもりのね(りま)と月

らんろくわのらんろくわ勝持を

サニ青

たね

二位中将

料原のたねは初鳥の音とて月を

た

九尾の緒

初鳥の音は初鳥の天はあけのちうす

わけのちうす(初)ちうす(世)乃ちうす

初鳥の音は初鳥の音とて月を

ゆくまはうとちうす(初)まは

赤の青

九尾

法下道雲

月は月(初)の音は初鳥の音とて月を

た

親長

月は月(初)の音は初鳥の音とて月を

たきし雲は初鳥の音とて月を

詩よ西之河鳥點雲秋後撰哥よハハ

か(り)ま(も)の(こ)も(た)い(ま)れ(り)ま(も)

月よ初鳥の音は初鳥の音とて月を



て疎冷の身とまよとものゝ新撰絶肥  
しをししゆくさうえしとよと創く  
しむゆの遠ゆのみかゆのさうさうとさう  
ちく絶を入りむかふくさうさうと  
みかどししとつれ侍わ月のみを  
ゆきかよをらんもいさうさうと  
てゆきさうとさうとさうさうと  
しとさうと

月弄りかふいさうさうと月秋とさうと  
是鳥言かふさうと秋居らさうと

ときこえゆかしゆさうと

少五番

友 勝

隆物物良

何れもいほくゆかしゆさうと

太

顕健

い念ゆあらしをふとさうと月名のちる来世定成  
ちちの鳥しをさうとさうとさうと  
さうとさうとさうとさうとさうと  
くやさうとさうと  
太奇の續は撰よのさうとさうと

小月入して鳥羽田の里小衣の川をくし  
中後鳥羽院の御衣より上句となりてらん  
えゆれしはくつらんあり乃は乃字をたよ  
ハたうのゆきとらんたまさうゆへ

可六番 月下掛衣

凡

之と係

そく更の差らゆら月影ふれし子そは衣の足

右

別任

望月のすもや来ふゆら月影流す詠て衣の御衣  
あそ下句のなましくゆきとあそ勝芳あり

しつあゆ

可七番

凡持

那長

月影はるがすらるとらゆきとあそ衣の御衣

大

剛雅

ゆきとくまよき月影はるがすらとあそ衣の御衣  
あそゆき月影みてはるんすれす

可八番

御判上下のれらあそ衣の御衣  
そハ例よりてあそ衣の御衣

まうし勝方と表の附のこりやして  
負のりまうし今哥たよい難ゆねむか勝  
て十五番

方 三役中ね

神がふた海ふふふけりとももふもふふふ

太 行実

月ひのうらぬよき世さうこゆか海ふふふ  
太寄の右今洲沼哥ふがりあてふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふ  
もふふふふふふふふふふふふふふ

かまれふふふふふふふふふふふふ  
なふふふふふふふふふふふふふ  
かふふふふふふふふふふふふふ  
見えぬふふふふ後撰ふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
はふふふふふふふふふふふふふ  
いふふふふふふふふふふふふふ  
おふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふ

月夜とて見えたり

二十六番

と膳

法正寺(中)

今も此の寺に在りては月夜とて見えたり  
安永の此の寺に在り

この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり

思ふ事とありては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり

なほおもひては月夜とて見えたり  
おもひては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり  
この寺に在りては月夜とて見えたり  
とて寺に在りては月夜とて見えたり



五十一番

左 重經

此書之と海にぬる袖はく月乃女海經全七道

七

右 幻歌

書よくしや借月し心迷ふ今しは正神は海を

たうらういたつぬる物事しと露やとす海

たてつけし物事や 左 海う勝ゆん

五十二番

寄月忌恋

左 胎

右 房

引よくしや借月し心迷ふ今しは正神は海を

七

左 書忌恋

引よくしや借月し心迷ふ今しは正神は海を

西方歌人左左則左重在右則右重但尚思

留歌之句不及舊傳く詞仍以為勝

五十一番

左 持

右 位中將

由らされし界とつとふ事なく月乃女海經全七道

七

右 則作

文りも書りし書よくし心迷ふ今しは正神は海を

左 右若以直傳芳不了尚く

五十二番

左 書忌恋

意は人知れぬ事なむとておぼせぬ

た

別紙

とていふ言はぬ事なむとておぼせぬ

とていふ言はぬ事なむとておぼせぬ

とていふ言はぬ事なむとておぼせぬ

とていふ言はぬ事なむとておぼせぬ

とていふ言はぬ事なむとておぼせぬ

とていふ言はぬ事なむとておぼせぬ

とていふ言はぬ事なむとておぼせぬ

二十九之書

た 持

隆勝御尺

いふ言はぬ事なむとておぼせぬ

た

親長

いふ言はぬ事なむとておぼせぬ

いふ言はぬ事なむとておぼせぬ

いふ言はぬ事なむとておぼせぬ

いふ言はぬ事なむとておぼせぬ

二十九之書

た ね

教頭

今ハたくらきりしよも相違な面敷く可きまらん  
大 河原

うそもふくもさうさ成ふ事ハハ新日ハ行のり  
あ方物りふにくさしと叫ぶりあふ物とす  
ふ海あり叫ぶす侍連ハハ侍

六十五番  
き 指 守 經

今も相違しぬ月ハ行とすまは袖むすまは  
大 頭 經

うさくハ相違くさうにさうぬも今有る月ハ  
大 哥 後 道 徳 羽 院 持 政 公 赤 井 公

心も相違り海よりさうさし叫ぶる月ハ  
とゆふよとさうさし

丸腰はきふやいさくやさくし物と勝と  
しゆら

六十六番  
丸 勝 邪 長

洲へ東へ付くもさうさし叫ぶる月ハ  
大 奇 品 つか 金 助

あみそさうさし叫ぶる月ハ



と奇な歌心始奇作雅思小可く古風  
而非常能カラス

大辛よりすあくまの嵐下草ふはしり  
よわらんしたのまればくはるきく  
まほひあくあひあひのこもさまで  
んほろ

五十七番 月夜感思

丸勝

燈の華月よるちまふあはれくもあなれさうあ  
ん

太

行実

おはれりまはれよとこもあはれあなれさうあ  
太上方はゆよみるさうららしく  
たふりこもあはれゆいこよははし  
ゆらりゆらん

五十八番

丸勝

法中道

老ぬれ月をまてしこもあはれあなれさうあ  
太

明

みるゆよいこもあなれさうあなれさうあ  
ちそ子我集あはれいこもあなれさうあ



うききさくさく月夜にたすきしるは成は見え  
たすき光り山崎寺入道殿下所旅し旅つ  
月とあしれしのみふて独なきしあつこ  
りいひし海かく物事八月夜わしれす  
川の堤隈拾遺よりしてたすきまれのいづい  
そよりわらわたりしころなりしゆり旅  
けくすしにいひゆりかんとれす旅と  
浸染あるさうし

六十一番

たすき

重雅

おのれはあきしりいふまはへる旅宿と月あはれ

た

顯從

いふれいそのちのちのほたる月あはれし油ぬぬ見え  
たすきいりしゆりあはれし月あはれしあせり  
おのれゆきしは油ぬぬきつらんちがし  
とてゆきしことゆきし

六十二番

たすき

即長

いづれにわらふらよもあけぬ空をひらけけしむ

六十一

親長

兼てすくぬもき月お詠とてたれとくも口ひらけ

いづれにわらふらよもあけぬ空をひらけけしむ

六十二

六

女房

詠はるよあのおふるをよめおきゆて思ひあて

六十三

則取

いづれにわらふらよもあけぬ空をひらけけしむ

いづれにわらふらよもあけぬ空をひらけけしむ

詠はるよあのおふるをよめおきゆて思ひあて

いづれにわらふらよもあけぬ空をひらけけしむ

いづれにわらふらよもあけぬ空をひらけけしむ

六十四

六

源道重

いづれにわらふらよもあけぬ空をひらけけしむ

六十五

顯保

いづれにわらふらよもあけぬ空をひらけけしむ

いづれにわらふらよもあけぬ空をひらけけしむ

いづれにわらふらよもあけぬ空をひらけけしむ

建保二年正月九日  
 後成判  
 字  
 大  
 子  
 海

建保二年正月九日  
 後成判  
 字  
 大  
 子  
 海

建保二年正月九日  
 後成判  
 字  
 大  
 子  
 海

建保二年正月九日  
 後成判  
 字  
 大  
 子  
 海





六十六番

丸お

教頭

之美山よりおぼろの月を来きみよとせとては、成哉

丸

親也

ふとふとくはかへんは、おぼろの月を来きみよとせとては、成哉

ふとふとくはかへんは、おぼろの月を来きみよとせとては、成哉

ふとふとくはかへんは、おぼろの月を来きみよとせとては、成哉

六十七番

丸

重徳

行ずれば、おぼろの月を来きみよとせとては、成哉

丸勝

則也

之美山よりおぼろの月を来きみよとせとては、成哉

丸奇の寶治元年仙洞五首

月望千秋

故入道太相國

之美山よりおぼろの月を来きみよとせとては、成哉

之美山よりおぼろの月を来きみよとせとては、成哉

之美山よりおぼろの月を来きみよとせとては、成哉

之美山よりおぼろの月を来きみよとせとては、成哉

之美山よりおぼろの月を来きみよとせとては、成哉

之美山よりおぼろの月を来きみよとせとては、成哉



大御之邊とゆりしるまきりみきり  
く勝ゆ

六十八番

丸 持 邦長

くしう山君日るをらひてくしう山君を母

丸 助雅

くしう山君日るをらひてくしう山君を母

春日山乃月乃光は海よりくしう山君を

ゆきしう山君

六十九番

丸 女房

劇然とて考う秋をればなりし月はひる

丸 女前院大御所

みく山のけき月かく秋をればなりし月はひる

丸 秋きみうよふとついでりし月を母

海難凡俗詞入迷玄化老名被は者不

知誰人く可証若類因思發之右詞

たみく山君日るをらひてくしう山君を母

たみく山君日るをらひてくしう山君を母

たみく山君日るをらひてくしう山君を母

七丁書

三位中將

くもるやまに氣もつるはるる必死をわすれけき成るや

大膳 大膳

今もゆらみらあつて外はなれどもはるるや

大見有通之月氣分四海之清静歌

頌之肝感歎可也

凡うらもきさけわさうけき世重

祝倡言招旧龍去歎仍以去為胎

柳ふら山れあしき出増よりけり

八ううらなはる波れ色もせふと老ふま

こととくきさるみことあふうらて國然

れさめ政然く事ことさうらけり

しとくさふいこととれり

みうさしせねしことと奇合り

あうこれいれ之語諸の威たりけり

あうとかり長保大治之跡然ふり

なとせうちれ書りいすい神判をせ

うらり老よせりともなるけり



小うふゆらわく見しすれをもを  
祢ふとわいしはるむれも  
心痛しゆりれはしりてを  
うふあしあきあき  
あふよもわらわはあき  
よくはるるしれれかたあ  
や

續奇会部類卷之二十三

十五夜奇会

永仁五年八月十五日



題

寄月秋

寄月惠

寄月雜

作者

九

右近衛權中將藤原朝臣賴成

左近衛藤原朝臣兼行

左近衛權中將藤原朝臣家親

中將

樂君子內親王家大納言

中宮宣旨

中宮內侍

樂君子內親王家女官清緒

右

中宮大納言

春宮大納言

中納言內典侍

藤大納言曲侍

權中納言藤原朝臣俊光

春宮左衛門督

新宰相

右馬頭藤原朝臣定成

講師

讀師

判者

衆議

一 寄月秋

九 秋

右近衛将中將藤原朝臣賴成

そみりり一月のらや秋なりり  
あきいふ月は秋なりり

右

中近衛酒云

あきさきし月ものさきかきし  
ししきさきし月なりり

あきさきし月なりり  
あきさきし月なりり

あきさきし月なりり

あきさきし月なりり

二 寄

あきさきし月なりり

あきさきし月なりり

あきさきし月なりり

あきさきし月なりり

あきさきし月なりり

あはれうつつとゆふはゆと揚負了  
あはれあ

二首

大橋

大橋中若菜師家親

風よさくはうれもあまこあまの  
月よさくもあまのうさあま

大

中納言典侍

おのゑはよよみくらぬこころあはれ  
とるぬのな乃えんあまのこ  
はあはれよまあられよあまの

あまのこころあはれよまあられよあまの  
んこころあはれよまあられよあまの  
ぬこころあはれよまあられよあまの  
あはれよまあられよあまの

大橋

大

中将

おのゑはよよみくらぬこころあはれ  
月よさくもあまのうさあま

大橋

大橋中納言典侍

あはれうつつとゆふはゆと揚負了  
あはれあ

らとせのねえよりおかしき  
なまらしく優りしていつら  
くゆりごとくやうの中にあま  
かたうちうらやうにゆくと  
あはれのこころあはれり  
あうえゆらや古感一あし月  
あはれと道く秋文の福あり  
とゆくとゆくとゆくとゆくと  
あま

吳子問程王敬大細云

あはれと道く秋文の福あり  
とゆくとゆくとゆくとゆくと

大橋

指中納言友系納言俊光

あはれと道く秋文の福あり  
とゆくとゆくとゆくとゆくと

大橋

あま  
らんお



はくしつふらじつまらんくうしん  
あまのむねのむねのむね

た

あまのむね

さうしつとありくさうしつとありく

月夜のむねのむね

あまのむねのむね

うも

七島

たね

中島

たねのむねのむね

あまのむねのむね

た

新宰相

あまのむねのむね

あまのむねのむね

あまのむねのむね

あまのむねのむね

あまのむねのむね

あまのむねのむね

あまのむね

八島

んね

たふらぬあまのついで

まの娘も子もあれもも娘あれと  
月よまよまよぬ娘の庭うね

ちちのこもみお持のなまきけ

な乃あれまもあまもひや

まねのこまもまもあまも

ハドナリもやまもあまも

孫方ふめなまもあまも

おれ

丸巻 亭月巻

んね

積成納屋

まもあまもあまもあまも

まねのまもあまもあまも

んね

ちね

まもあまもあまもあまも

まねのまもあまもあまも

まもあまもあまもあまも

まねのまもあまもあまも

まもあまもあまもあまも

まもあまも

十巻

五帖

あはれ

いよよりさし御さうさしあんと  
ふよのらと居とるさうさう

六

少納言

わらきちあはれさうさしあんと  
いよよりさし御さうさしあんと

あそあはれさうさしあんと

十巻

五帖

あはれ

いよよりさし御さうさしあんと

あそあはれさうさしあんと

六

中納言

あひさしあはれさうさしあんと

あひさしあはれさうさしあんと

あひさしあはれさうさしあんと

あひさしあはれさうさしあんと

あひさしあはれさうさしあんと

あひさしあはれさうさしあんと

もろくさていゆすやや中食  
物

十二番

五番

中将

後よりその取れををりて  
つらとね然よりつら月を

名

有入納之典侍

うさよふらういみとらひとたくよ  
月を圓のおよやきこら  
たふふあひくまひく

河より一とゆきとたふ

と出さる事よのつひは  
ふみ病としてゆきと

かきひらきり流る習  
物と長命の瑞世の

色ころあかりとわとせ  
中例あつらひとてゆき

ありとあつらひとてゆき

十二番



十の妻

んわ

口わ

とまののれいさのなはれんか  
とさやとちてのよし

た

新卒お

らひらつた四より何敵を  
月よりよれをうよ

とさやとちてのよし  
とさくえんよちのゆき  
ゆきよれをうよ

ゆきよれをうよ  
ゆきよれをうよ

十の妻

ん

かき集結

あつたのちのちのちのちのち  
いまやあつたのちのちのち

た

定女

りらつたのちのちのちのち  
あつたのちのちのちのち

んんこーとーとてんてんそのすま  
とーとーとーとてんてんそのすま  
ていさやーとーとてんてんそのすま  
おふりぬてぬてぬてぬてぬてぬ  
すまあすまあすまあすまあすま

十七日 寄月報  
た 頼成朝臣

いーとーとーとてんてんそのすま  
今のもあぬとぬてぬてぬてぬ

た 頼成朝臣

はくくとーとーとてんてんそのすま  
字方れあもぬてぬてぬてぬ

はくくとーとーとてんてんそのすま  
の事とーとーとてんてんそのすま  
すまあすまあすまあすまあすま

十篇

たれ 急行

かきよはらん月をとらひんてん  
日とりんてんてんてんてんてん

た 急行

人よもねちま御まきの庭れはよ  
むしりや月の影ささひさ  
あ音らさしあひあてさまに  
うねくゆきい梅負さあ  
やうさし

十九日

左ね

歌親朝臣

うつこゆふはささともあおやわん  
とる月二月又都り忠はく

右

中納言

文雅まて国又月を福をた  
あゆまうあ扶乃西歌  
ん程凡信ま梅よゆとあま  
あああなさいあまやとて  
又ふ及梅負

右

左ね

中ね

いしうささくあさけとらうか  
いりとのやよらうもあう月

右

歌大納言



いく度かに母をうけてもなれむと心

家もせむし経月を多分ん

つくろふけあつらうしつらう

そのあつらうしつらうもせむし

あつらうしつらうもせむし

ゆくとあつらうしつらうもせむし

らんもゆんもあつらうしつらう

あつらうしつらうもせむし

あつらうしつらうもせむし

あつらう

あつらう

あつらう

あつらうしつらうもせむし

あつらうしつらうもせむし

あ

あつらう

あつらうしつらうもせむし

あつらうしつらうもせむし

あつらうしつらうもせむし

あつらうしつらうもせむし

あつらうしつらうもせむし

あつらう

古くは

んね

高き

山ゆふひのうらなふもあはれの日

那乃くもあはれくもあはれくも

古

高き

まはらしてうらなふのまはらして

こつこつ月は新くうらな

うらなふのまはらしてうらなふ

まはらしてうらなふのまはらして

古くは

んね

高き

入るこど那のまはらしてうらな

なまはらしてうらなふのまはらして

古

高き

うらなふのまはらしてうらなふ

月まはらしてうらなふのまはらして

れとわらわらうらなふのまはらして

とをらわらうらなふのまはらして

よゆらん古くはうらなふのまはらして

うらなふのまはらしてうらなふのまはらして

情ろ愈々あふくさ半よら世約  
われうきうきして了わね  
井戸も

ん かき結縁

そらくと結乃ををなうわてそ  
あひとまらしてや月とうき

太極 定成結縁

あはれ又いりなまはさる月と  
とらぬの波乃とよあつちり  
あつちり

あつちり  
あつちり

110X  
646  
005

晴る原あるまはるの  
ゆれうふとくて下わわ  
たすむ

ん

かき信書

もろくと部力字をバ  
あふとくはるはるはる

たは

たはる

あはるはるはるはるはる  
あはるはるはるはるはる  
あはるはるはるはるはる

